

留学生と専門講義

——講義理解の支援方法——

片山 智子

目次

1. はじめに
2. 講義の特徴
 - 2.1 講義の聴解と読解
 - 2.2 講義で何を理解させたいか
3. 講義の構造
 - 3.1 講義の構造
 - 3.2 講義の構造と学生の理解
4. 教師の話し方（わかりやすい話し方・わかりにくい話し方）
 - 4.1 メタ言語表現
 - 4.2 くりかえしの使用
 - 4.3 フィラー・曖昧な語尾
 - 4.4 話す速度・表情のある話し方
5. パワーポイントは理解を助けるか
 - 5.1 パワーポイントを使った講義
 - 5.2 教師の話し方の特徴
6. 講義を理解するための三つのステップ
7. まとめ

1. はじめに

近年、日本でも外国からの留学生が増加している。1999年には全国で6万人に満たなかった留学生は、2003年に10万人を超えた。昨年2008年7月には、政府から「留学生30万人計画」が発表されている。これまで留学生は少数派であり、留学生のケアは留学生センターや言語教員が行うものという認識が一般的だった。しかし、最近の留学生の増加とともに、言語教育の場だけではなく専門教育の場でも、留学生に対する配慮の必要性が論じられ始めている。本稿では、「講義」型の授業を取り上げ、留学生が専門講義を理解する際の支援方法について考えてみたい。ここでいう講義とは、教員が大教室で多数（100名から300名程度）の学生に向かって独話の形で語りかける形式の授業である。

留学生が、「講義」を理解するために必要なこととしてまず考えられるのは、言語知識つまり専門的な語彙や表現、非漢字圏の国の学生であれば特に漢字語彙などだろう。日本語教育の現場

でも、「言語知識」の指導に焦点を当てた研究や実践は多く行われている（鬼木1995, 平尾1999）。だが、講義は、1時間半という長時間にわたって教師の話聞き続ける授業である。非母語話者である留学生が講義理解を成功させるためには、単に知識量や知識を利用する力があるかどうかだけでなく、講義中に与えられる情報を取捨選択し、要点を構造化することができるかどうか重要な要素になる（山下1999a, 片山2002）。

本稿では、講義の構造や教師の話し方を分析し、講義を理解する際の手がかりとなるのは何なのか、どのような講義が学生にとって理解しやすい（理解しにくい）のかを示す。また、最近主流になってきた「パワーポイントを使った講義」を取り上げて、その特徴を考察する。そして、講義を行う教員に対しては、「わかりやすい講義の進め方」、留学生に対しては「講義を聴いて理解する方法」について、何らかのヒントを提示することができればと考えている。

筆者は、2001年から立命館アジア太平洋大学（以下APUとする）で、留学生の講義理解についての研究を続けている。以下は、APUで開設された講義担当の専門教員と言語教員の協働で行われるプログラム「アジャクト・コース」¹⁾の中で得た所見と、日本語のクラスで実践した講義理解支援授業の一例をもとに、留学生に対する講義理解の支援方法を探ったものである。

2. 講義の特徴

2.1 講義の聴解と読解

専門的なコンテンツは、講義を聴いたり専門書を読んだりして学ぶことができる。ここでは、まず読解と聴解の違いを考えてみよう。同じような内容の論文と講義があったとする。文字で書かれた文章は、読み手が主体となって、大切な部分に線を引いたり、分からないところを繰り返し読んだり、時間をおいて再度読み返したりできる。これに対して、講義で与えられる音声情報は、一瞬で消えてしまい前に戻って聞きなおせない。それだけに、講義者は意識的にあるいは無意識に、聞き手に配慮した話し方をしている。例えば、これまで話したあるいはこれから話す内容に言及する「メタ言語表現」（本稿4.1参照）やくりかえしを多用することで、重要なポイントを示したり、聞き逃した要点を聴くチャンスを再度与えたりする。話題の脱線も、長時間の講義の途中で聞き手の注意を引き、集中を促す働きを持っている。

聴きやすい講義というと、NHKテレビの番組「ニュース解説」や放送大学の授業のように、原稿が前もって準備してある無駄のない話し方をイメージする人が多いだろう。以前、講義担当の教員に文字起こしをした講義の SCRIPT を見せたところ「私はこんな話し方をしているんですか？ 恥ずかしいから、これは外に出さないでほしい」という反応があった。おそらくこの教員は、雑誌などで目にする対談やインタビューの記事を、実際の発話だと思い、自分が実際に話した言葉がそのまま書かれた SCRIPT を見て、それとの違いにショックを受けたものと思われる。インタビュー記事は、文字化される際に、「あのー」、「えー」、「んで」などといった無意味語（フィルター）や過剰な繰り返しが削除され、全体を分かりやすく再構成される。つまり、これは理解しやすく書き直された「目で読む発話」であり、実際の発話（資料1参照）とは異なるものなのだ。

また、講義とは、教員が大教室で多数（100名から300名程度）の学生に向かって独話の形で語りかける形式の授業であるが、実際には目の前にいる学生の反応を見ながら話されるものであり、「独話」というよりも、「対話の変形」と考えたほうがいいかもしれない。

このような、講義の持つ独特なスタイルの中に、実は講義を理解する際の「聴くための手がかり」が隠されているのである。

2.2 講義で何を理解させたいか

講義にはさまざまなタイプがあり、それによって教員が学生に求める「理解」の形にも違いがある。大きく分けると、「専門的な知識を与えて、その知識を正しく覚えることを求める授業」と「様々なものの考え方や見方があることに気づかせる授業」の二つに分かれだろう。

知識伝達型の講義の場合は、留学生でも基礎的な概念を母語や英語で予習したり、キーワードの意味を自分で調べたりすることができる。しかし、考え方や見方を気づかせるような講義では、教師は受講者に対して講義の内容を覚えることを求めているのではなく、むしろ、講義で示される「概念」を理解することで、自分の頭でいろいろなことを「考える」きっかけにしてほしいと考えていることが多いようである。このような授業では、具体的な例を使って説明がなされることが多い。具体例を挙げることで、イメージが湧いて主題が理解しやすくなる。しかし、学生は具体例の内容はよく覚えているのに、何を説明するためにその例が出されたか忘れてしまう場合がある。特に、学生が興味を持った面白い具体例はインパクトが強すぎるせいか、「先生は何のためにこの話をしたのか」という質問をすると誰も答えられないという皮肉な結果になったりする。部分の理解はできていても、教師が伝えたかった講義の主題が何だったのかは理解できていないのである。

3. 講義の構造

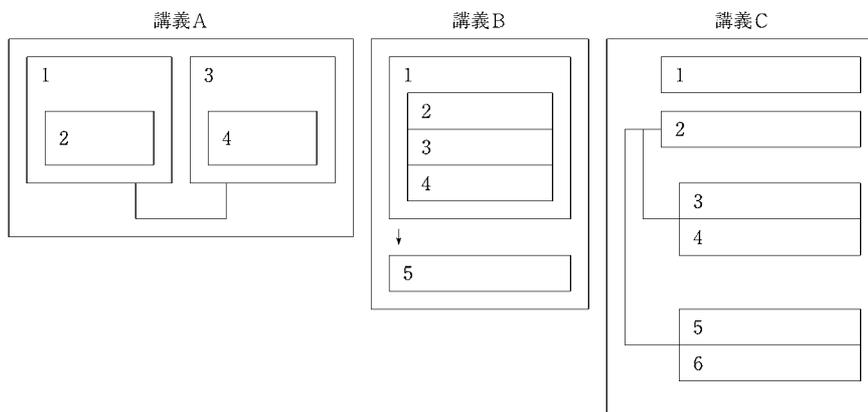
3.1 講義の構造

1回の講義は普通90分程度の長さを持つが、実際には、5分から15分程度のまとまった内容を持つ小さな話段で構成されている。

図1に、アジャнкт・コースの中で実際に見られた、異なった構造をもつ講義の例を示した。数字は講義内の話段を示す。各話段は、実際の発話は1→2→3→という流れで話される。つまり時系列で見ると、1→2→3→といった直線的な繋がりが続いているが、話される内容を構造化すると、それぞれの話段が、上位と下位の関係にあったり、入れ子型になっていたり、様々な階層構造を作っている。

講義理解とは一つ一つの話段の内容を理解することで、それさえできれば講義が理解できると誤解される場合が多いようだ。しかし、それは部分的な理解でしかない。講義を聴きながらその階層構造をつかみ、一つのまとまりをもった講義として理解して、初めて理解したことになるのだ。2.2であげたような具体例だけを覚えている学生は、部分の理解はできていても講義のテーマとの関連付けができないために不完全な理解に終わっている例だと言える。

【図1】 講義の構造



そこで、まず講義をする教師自身が、自分の講義がどのような構造なのかを意識して話すことが重要である。話し手が意識することによって、おのずと聞き手にも構造を理解しやすい話し方になるからだ。例えば、講義を始める前にその全体構造を与えることは、聞き手の理解を大いに助ける。つまり、「今日の講義は何について話すのか」「ポイントはいくつあるのか」など、まず予告をするのである。それによって講義の大枠を与えられ、学生は自分の中でフレームワークを持つことができ、講義中も、今聞いていることが講義全体の中でどのような位置づけをもっているのか、関連付けながら聴くことができるようになる。

3.2 講義の構造と学生の理解

図1の例にあるように、講義は、複数の話段が関係性を持ちながら、全体で一つのまとまりを作っている。中でも、それぞれの話段が対比や因果関係を持っていたり、時代を追う形で繋がっているような講義は、構造がはっきりしているので留学生にとっても理解しやすい。

一方、図1の講義Cは、一つのテーマをいろいろな角度から見っていくパターンの講義である。話段2で話した内容を、(3・4)と(5・6)の二つの異なった視点で分析しており、講義の理解を図るためのテストでは、講義後、自分で各話段の内容を有機的に結びつけ再構成することが要求された。講義中にそれぞれの話段を理解して講義ノートが正しく取れたようにみえた学生でも、言語クラスでの理解テストの結果は、他の講義に比べるとかなり低かった。話段の関連付けが複雑な講義は、講義後に自分の講義ノートを見ながら、講義全体の再構成する過程を経なければ、理解につなげることができないようである。

この他に、「謎解き型」と言える講義もある。これは授業の初めに、学生に疑問を持たせるような問題点を与え、講義の中で答えを探していくパターンで、人文学系の講義で何度か観察された。結論まで聞いて、初めて全体の話段の関係性が見えてくる。最後まで学生の興味をひくための技巧と考えられ、理解力のある学生には面白い授業だと言える。しかし、講義の途中で、全体像がつかめないため、留学生にとってはかなり負担が大きい。今話されているトピックが何のために必要なかがわからないので、その部分が理解できなかったり、関連付けが難しいために前半の内容を後半まで記憶していることができないのである。

このように、講義は話される内容や構造によって、理解が難しくなる場合がある。では、どのような話し方をすれば学生にとって分かりやすい講義になるのだろうか。次節では、教師の話し方から講義のわかりやすさとわかりにくさについて考えてみたい。

4. 教師の話し方（わかりやすい話し方・わかりにくい話し方）

筆者はアジャクト・コースの中で、同じ教員の同じ内容の講義を何度も聴く機会を持った。教師によって話し方に違いがあるのは当然だが、先学期にはわかりやすかった講義が、次の学期には非常に聞きにくくなってしまおうというように、同じ講義はふたつと見られなかった。分かりやすさの要因は「話される内容」だけではなく「どう話されるか」にもあるのだ。以下に、教師の話し方の特徴を挙げ、それが学生の理解にどう影響するか、観察された例をまとめた。

4.1 メタ言語表現

3.1で示したように、講義の本題に入る前に、内容の「予告」が与えられると、学生は、自分の中に講義の大まかな枠組みを作ることができ、その枠に照らしながら講義を聞くため、理解の大きな助けになる。この「予告」を示すような表現をメタ言語表現³⁾という。

中井・寅丸（2008）は、講義で使われるメタ言語表現を「講義の進行に言及する表現」と「講義の伝達内容に言及する表現」とに分類した。進行に言及する表現とは、「そこでまず……について説明しましょう」「ひとつは」等で、受講者は、これらの表現によって、講義の大きな構造を捉え、その中で、伝達される内容の枠組みや流れを知り、講義を理解することができる。一方、伝達内容に言及する表現とは、「これは重要なことなのですが」「さきほどお話ししましたように」等、講義の内容をより明確に提示するための配慮として用いられる（資料2下線部E・D）。このような表現を手がかりとして、受講者は、講義で用いられる用語についてより深い理解をし、講義の内容の焦点化を図ることがより容易になるのである。

4.2 くりかえしの使用

講義では、くりかえしが多用される（高橋 2001, 片山 2003）。くりかえしには単語レベルや文レベルのものがある。前に述べられた内容が違う表現で示されるのも、一種のくりかえしである。これらのくりかえしの表現は、講義の階層構造を作り出すマーカーになることがある。例えば、「話題を表わす表現」が内容を表わす部分をはさみこむ形で出現するくりかえしは、全体として内容のまとまりの範囲を明示する。

講義の音声情報は一度話されると次々に消えていくが、学生がくりかえしに気づくことで、そのくりかえされたトピックについて話が展開されているのを確認し、脇道に逸れた話が元の話題に戻ったことにも気づけるのである。

4.3 フィラー・曖昧な語尾

フィラー（「あー」「えー」など）は意味のない言葉ではあるが、話段の切り替えや重要な内容の

前に頻出するため、理解を助けるキーになる場合がある。日本人の聞き手は、この、フィラーを手掛かりにして「これから本題に入ろうとしている」「ここでトピックが変わるのだろう」と無意識に感じ、聴くための態勢を整えるのである。

また、日本人の話し方には、語尾を省略したり曖昧にして、聞き手に理解を委ねるという特徴がある。講義でもこの話し方が観察されることがある。日本人であれば、文脈や前に出現する副詞などを手がかりにして、話したい内容を予測できる。しかし、留学生は、文の最後まできちんと話されないと意図がとれない場合が多い。文末を曖昧にせず、最後まで話すよう気をつけたい。

4.4 話す速度・表情のある話し方

留学生に対する配慮で、ゆっくり話そうとする教員もいる。しかし、速度を気にすることで話すリズムが不自然になり、かえって聞きとりにくくなる場合も多い。

わかりにくいのは、速い話し方よりも、抑揚のない話し方である。常に同じ調子で平坦に話されると、どこが特に大切なポイントなのかを聞き分けることが難しくなるからだ。学生に向かって表情豊かに語りかける教師の講義は、教師の熱意が感じられるだけでなく、理解しやすいと言われる（古宮2004）。表情豊かな話し方をする教師は、学生の反応を見ながら講義を進めているようである。一方的ではないインタラクティブな講義をおこなっているため、たとえ早口であっても、強調したいところでは自然とゆっくり話したり、声が大きくなったりして、分かりやすい話し方になるのではないだろうか。

以上、講義における話し方の特徴を考察した。このように、聞き手は、さまざまな話し方の特徴をマーカーとして、講義の内容や構造を理解している。日本人なら、無意識に利用することができるマーカーであっても、留学生に対しては、その特徴を意識化させる指導が必要だと思われる。

また、これらは、講義で示される内容を表す言葉ではない場合が多いので、ノートに書きとめられることはほとんどない。しかし、後から見て分かりやすいノート作るには、講義中にマーカーを聞いたらすぐ、全体の構成をメモしたり、番号をつけたり、関係を矢印を使って示すなどのテクニックも必要だろう。

資料2には、実際の発話のスクリプトから、講義理解のためのマーカーをいくつか示している。

5. パワーポイントは理解を助けるか

5.1 パワーポイントを使った講義

講義は、教員が話す音声情報だけで構成されているわけではない。テキストやレジュメ、板書などの文字情報が与えられ、聞き手はその情報をうまく利用して講義を理解していく。特に、「板書」は理解を助ける大きな役割を果たす。板書によって話の流れが示されることや、耳で聞いただけでは理解できない重要語が文字情報として与えられることで、話の内容と照らし合わせ、視覚と聴覚を使って話を再構築しながら聞くことができるのである（三國1998, 片山2002, 2003）。

最近の講義の傾向として、板書型の講義からパワーポイント中心の授業への移行が挙げられる。

パワーポイントを使う利点は、要点を示しながら話すことができるので、話が逸れたり、ポイントを言い落としてしまう恐れがなくなることだろう。聞き手にとっても、今話されている要点を見ながら聞くことができ、文字だけでなく図表や写真などグラフィカルな情報も与えられるのでわかりやすい。しかし、パワーポイントを使った話は、内容が頭に残りにくいと言う声もよく聞かれる。それはどうしてだろうか。本節では、板書型の講義と比較しながら、パワーポイントを使った講義の難しさを考えてみたい。

ひとつめは、ノートが取りにくいという点である。聞きながら書くことは、留学生にとって負担が大きい作業であるが、板書型の授業は、教師が書いている時間にノートを取ることができ、見て写すことに集中できた。しかし、パワーポイントにはすでに要点が書かれており、スライドが映されると同時に、内容の説明が始まる。視覚情報は教室の前方にあり、学生はそれを見ながらその要点を手元のノートに書き取って、同時に教師の話の内容を聞くことになる。そのため、スライドに書かれている内容を実際に理解する時間もないまま端から写しているうちに、スクリーンは次のスライドに変わり、全く役に立たないノートになってしまったりもする。このように、パワーポイント型授業のノート・テイキングは、非常に難しいものである。事前または授業後にパワーポイント資料を配布するなどして、ノート・テイキングの負担を減らす必要があるだろう。

ふたつ目の理由は、講義の全体構造がつかめなくなることである。板書型の講義では、前に書かれた内容がそのまま残っていて目で見ることができるので、今聞いている話との関連付けもしやすいが、パワーポイントでは映されるのは「今話している内容」だけであり、前後の内容とのつながりをつかむことが難しくなる。資料が配布される場合でも、同様である。パワーポイントの資料では、講義の中心となる重要項目も、例示など理解を助けるために加えられた下位項目でも、見た目は同じ大きさのスライドが並んでおり、講義の全体構造を理解することは難しい。

この問題は、講義全体の流れを俯瞰できるようなレジюмеを同時に配布することで、ある程度解決できるだろう。さらに、パワーポイントのどのシートがレジюмеのどの部分と対応しているかが示されていれば、理解の大きな助けになると思われる。

5.2 教師の話し方の特徴

パワーポイントを使うことで教師の話し方も変化しているようである。

まず、話の流れを示すメタ言語表現が少なくなったという印象を受ける。スライドが切り替わると、話も唐突に切り替わる場合もある。講義の構造がつかみにくいのは、パワーポイントの視覚的な問題だけではなく、話し方にも原因があるのではないだろうか。

これまでの講義では、使われる指示語は、前に話したことやこれから話すことを指す文脈指示の「これ・それ」がほとんどであったが、パワーポイントのスライドやレーザーポイントで示している部分を指す現場指示の「これ・それ」も多く使用される。そのため、教員の言う「これ」が文脈指示なのか、現場指示なのか分かりにくい場合がある。また、学生は映し出されたスライドを常に見ているわけではなく、ノートを取ったり配布資料を見ながら聞いたりしているので、現場指示の場合、何を指しているのか分からなくなってしまうのである。

話す際、教師はパワーポイントを見て、学生の反応はあまり見ていない。そのため、抑揚のない平坦な話し方になりがちで、大切な部分を強調したり、ジェスチャーを使ったりすることがな

い。これも講義を分かりにくくしている一因だと思われる。

パワーポイントが普及したのは最近のことだが、講義や発表ではすでに主流になりつつある。しかし、うまく使いこなせている教員はまだ少ないのが現状だろう。今後は、効果的なスライドの作成と同時に、上にあげた問題点を補うために、講義の流れを示すメタ言語表現を使用するなど、話し方を変えていく必要があるだろう。

6. 講義を理解するための三つのステップ

以上、講義の話し方の特徴から、どうすれば留学生の理解を支援することができるかを見てきた。では、留学生自身は、どのようなことに気をつけて講義を受ける必要があるのだろうか。

本節では、筆者がアジャンクト・コースの最後に学生に示している「講義を理解するための三つのステップ」を一例としてあげる。

ステップ1 講義が始まる前に

講義のテーマについて簡単な知識をもっておく。

- 講義と同じテーマの読み物を読んでおく（インターネットで簡単に見つけられる）
英語や自国語で読むと、背景知識が確認できる。
日本語で中学や高校生向きのものであると、背景知識と基本語彙が分かる。
- 渡された教材（テキスト・レジュメ）に目を通す。
講義の要点と枠組みを知っておく。注意して聞きたいこと、疑問点を、講義の前に考えておく。
- 専門用語はどう発音するか確認しておく。音読してみるとよい。
読んでわかる言葉も、講義中に耳で聞いただけではわからないことがある。

ステップ2 講義中

ノートを取りながら先生の話聞く。

- 講義の本題に入る前に述べられる「その日の講義について」を聞き逃さない。
- ポイントを示す言葉以外の手がかり（大きい声・ポーズ・ジェスチャー）活用。
- 分からないことがあっても、止まらない。大切な内容は、言葉や表現を変えてくりかえし話されるので、大丈夫。

*先生が話す2種類の言葉に注意しよう

- | | |
|-----------------------------------|---------------------------|
| A. 内容に関係があることば | |
| 専門用語や先生が何度も繰り返す内容は特に重要なので、意味を調べる。 | |
| B. 流れに関係があることば……前後関係や重要度の手がかりになる。 | |
| ①予告の言葉・まとめの言葉 | （例）今日は、～についてお話しします（しました）。 |
| ②トピックを提示する表現 | （例）～というのは、どうして～かという |
| ③順序を表すことば | （例）まず、つぎに、さいごに |
| ④言い換えのことば | （例）つまり、要するに、～というわけです |

⑤意味のないことばも、話題の変わり目、重要項目を話す前のマーカーになる。

*ノートテキングで気をつけること。

- ①ノートはあなたのためのもの。自分が後で見てわかるように書く。母語や絵でもよい。
- ②授業の初めや、新しいトピックが始まる前に述べられる「これから話すことの予告」を聞き逃さない。聞いたらすぐに、メモしておく。
- ③ポイントとポイントの関係が視覚的にわかるようにする。字の大きさや色を変えるのも効果的
例：「ここには二つの問題点があります。」と言ったら、ノートに①②と番号を書く。
例：理由や原因，結果だと思ったら，→ ⇄などで関係を書いておく
- ④意味だけ分かればいいものは，母語で書いてもいいが，専門用語などは日本語で書く。
試験やレポートを書くときに日本語で表現しなくてはいけないから。
漢字語彙は漢字で書く（分からなければ授業後すぐに調べておく）。
- ⑤テキストやレジメがあるとき
直接書き込んでもいいが，必ずノートも準備する。
ノートに書くときは，対応するテキストのページを書き込む
- ⑥「重要らしいが，わからないこと」があったら
「わからない」ということをノートしておく。同じ言葉が何度も出てくるようなら，それは重要語なのでメモする。レジメやパワーポイントのどこの部分かマークする。
例：下線をひく・？を書く・聞いたとおりにローマ字やひらがなで書く。

ステップ3 講義後

すぐにノートをまとめ直すこと。

講義中に書いたノートは未完成で，そのままでは役に立たない。

- 講義中に「わかったと思ったこと」が「本当にわかっているのか」チェック。
講義の内容と構成を思い出し，講義のポイントが何だったかを確認。
- ノートは足りないところを書き足したり，調べたりして，整理しておく。

*わからないことがあった場合

- ①まず，それが講義の中で大切なポイントかどうかを考えること。
たとえば，教師の話や資料の中で何度も出てくる言葉は大切。
- ②ノートにメモしておいた言葉を，レジメ，資料，辞書からさがす。
レジメ，資料のどの部分に書いてあるのか見つける。
正しい漢字の書き方，読み方を調べる。
- ③レジメ，資料が難しすぎてわからない場合は，キーワードを元にインターネットや英語（母語）で同じような内容のものを読んでみる。
その後でもう一度，レジメや資料に戻ると，理解しやすくなる。
- ④人的リソースを使うこと。友達や先生にどんどん質問しよう。

7. まとめ

90分あまりにわたる講義では，まとまりを持った短い話段が階層構造を作っている。講義の部分的な内容の理解だけにとらわれずに講義全体の構造をつかむことが，講義理解を成功させるために重要なことである。しかし，それは，留学生にとっては最も難しいことでもある。

教師は、講義の初めに全体の流れを示す予告をおこない、講義中にも効果的にメタ言語表現やくりかえしを使うことで、学生の理解を助けることができる。特に、講義を始める前にその全体構造を与えることは重要である。学生が、自分の中でフレームワークを持つことができ、講義中も、今聞いていることが講義全体の中でどのような位置づけをもっているのか、関連付けながら聴くことができるからである。また、最近主流になりつつあるパワーポイントを使った講義は、特に講義構造がつかみにくいため、話の流れを示すメタ言語表現を使用して、学生の理解を助ける必要があるだろう。

フィルターなど教員の話し方の癖を知ることで、学生は講義を理解しやすくなる。そして、ノートを取る際には、メタ言語表現などを聞き流してしまうのではなく、それを利用して番号をつけたり矢印などで関係を示したりして、わかりやすいノートを作ることが大切である。留学生は、講義中には部分の理解が精一杯で、聞いていることと講義の大枠を関連付けることは難しい。講義中のノートは、理解の過程を示した未完成なものである。講義後に必ずノートをまとめなおして、自分の中で講義内容の再構成をする必要がある。このような復習をして初めて講義を理解できるのだということを、学生に意識化させることも重要である。

本稿は、留学生のための講義理解の支援という視点で、講義の話し方をとりあげた。しかし、ここに挙げたことは全て、日本人学生にもあてはまることであろう。大学での講義を考えるための一助になれば幸いである。なお、5節で述べたパワーポイントを使った講義に関しては、筆者が複数の講義を受けた際の印象をまとめたにとどまっている。今後は、詳しいスクリプトの分析をおこない、パワーポイントを使用する際の講義の注意点などを明らかにしていきたい。

注

- 1) アジャンクト・コースとは、講義担当の専門科日の教員と言語クラスの教員の協働で行われるプログラムである。APUのアジャンクト・コースは、2000年から2002年度までは、正規の専門講義（受講者は日本人と留学生）とそれに付接する形の言語クラスから成り、留学生は両方のクラスで単位が与えられた。その後、講義は日本語クラスに組み込まれ、留学生だけを対象としたものに変化した。授業の流れは、受講前に日本語クラスで語彙や基本的な概念の導入などプリタスクをおこなった後、学生と言語教員は大教室で専門講義を受講する。受講後の日本語クラスで、言語教員が作成した講義理解タスクを使用して講義の内容や講義を聴くための技能を学ぶ。講義はビデオで記録され、コンピューターでダウンロードして復習に利用できるようになっている。
- 2) メタ言語表現の分類は、研究者によってさまざまで、副詞や接続詞もメタ言語表現のひとつとする考えかたもある。講義理解に関わるメタ言語表現については、西條2000、渡邊2001、片山2003に詳しい。表1は、中井・寅丸（2008）が、講義で使われるメタ言語表現を「講義の進行に言及する表現」と「講義の伝達内容に言及する表現」とに分類したものである。

【表1】 メタ言語表現の機能分類

A. 講義の進行に言及する表現	B. 講義の伝達内容に言及する表現
①話段の構造に対する言及 1. 前触れ型, 2. 後付け型 ②項目列挙 ③発話自体の機能明示 1. 理由, 2. 要点, 3. まとめ ④述べ方に対する言及	①言葉の定義 1. 用語の言い換え説明 2. 用語についてのことわり ②表現の検索 ③受講者の知識・理解に対する言及 ④自己発話焦点化/他者発話焦点化

(中井・寅丸 2008 p. 75)

資料

【資料1】 講義のスクリプト

少しずつレム睡眠が、出てくる。で、あのう、だんだん、このレム睡眠が、あー、というかこの眠りが、あの、終わりに近付くにつれて、えー、レム睡眠が多く出てくる。で、まあ、夢もよく見る。で、夢を一中略— 75%が、このノンレム睡眠というわけです。で、まあ、あのう、だいたい、こう、一晩に4回から5回の、おー、周期で夢を見ているわけですね。えーと、それでは、あの、まあ、で、あの、何のために人は眠るのかということなんですけれども、まずひとつは、あのう、ま、これは、あー、当然考えられることなんですけれども、エネルギーの、おー、消費を抑えるということなんです。うん、ま、つまり、ずうっと起き続けていると、ま、かなりの、おー、エネルギーが必要なんです。それでまあ、あー、そういう、エネルギーを、おー、節約するんですね。一中略— あ、ええと、それから、もうひとつ、あのう、これは重要なことなんです、うーん、あの、ま、何ていうんですかね、えー、心配性の人とか、えー、苦労性の人にはよく寝るんです。で、あのう、これは、人間が、あー、活動をする、カテコールアミン、このカテコールアミンという物質が、あー、できるらしいんです。うん。で、これが、えー、多すぎると、おー、躁状態になる。で、おー、このう、興奮状態が続けば、あー、妄想状態になっていくんですけれども、眠るとこのカテコールアミンが減少するんです。うん。で、まあ、精神の、おー、平衡が保たれる。うー、まあ、要するに、眠ることで、あのう、精神の、おー、精神活動のバランスをとってるってわけですね。うん。

(産能短期大学 1990, p. 244)

【資料2】 講義中のマーカー

少しずつ^Aレム睡眠が、出てくる。で、あのう、だんだん、この^Aレム睡眠が、あー、というかこの眠りが、あの、終わりに近付くにつれて、えー、^Aレム睡眠が多く出てくる。で、まあ、夢もよく見る。で、夢を一中略— 75%が、このノンレム睡眠という^Bわけです。で、まあ、あのう、だいたい、こう、一晩に4回から5回の、おー、周期で夢を見ている^Bわけですね。^Cえーと、それでは、^Cあの、まあ、で、あの、何のために人は眠るの^Dかということなんですけれども、^Eまずひとつは、あのう、ま、これは、あー、当然考えられることなんですけれども、^{F1}エネルギーの、おー、消費を抑えるということなんです。うん、ま、つまり、ずうっと起き続けていると、ま、かなりの、おー、エネルギーが必要なんです。それでまあ、あー、そういう、^{F2}エネルギーを、おー、節約するんですね。一中略— あ、ええと、それから、^Eもうひとつ、あのう、^Dこれは重要なことなんです、うーん、あの、ま、何ていうんですかね、えー、心配性の人とか、えー、苦労性の人にはよく寝るんです。で、あのう、これは、人間が、あー、活動をする、カテコールアミン、このカテコールアミンという物質が、あー、できるらしいんです。うん。で、これが、えー、多すぎると、おー、躁状態になる。で、おー、このう、興奮状態が続けば、あー、妄想状態になっていくんですけれども、眠るとこのカテコールアミンが減少するんです。うん。で、まあ、精神の、おー、平衡が保たれる。うー、まあ、^G要するに、眠ることで、あのう、精神の、おー、精神活動のバランスをとってるって^Bわけですね。うん。

A : キーワードの繰り返し B : 話題のまとめ C : 話題の転換の前のフィラーの連続 D : 明示 E : 列挙
 F : 繰り返し(言い換え) G : 言い換えの接続詞

(A~Gの用語は本稿のみで使用。学生に対しては具体的にマーカーの働きを説明している。)

参考文献

- 大村彰道. 2001. 「文章理解：結束性と意味の創造」, 大村彰道監修『文章理解の心理学 認知, 発達, 教育の広がりの中で』: 1-16 北大路書房
- 鬼木和子. 斉山弥生. 1995. 「第2言語による講義の聞き取り能力の特性とその養成」『産能短期大学紀要』第28号: 77-90
- 学習技術研究会. 2002. 『知へのステップ——大学生からのスタディ・スキルズ——』くろしお出版
- 片山智子. 2002. 「講義理解への橋渡し教育——アジャクト・コースの日本語クラス」『ポリグロシア』第5巻: 129-141 立命館アジア太平洋大学言語教育センター
- 2003. 「日本語学習者の講義理解—何が学生の理解を誤らせるのか—」『ポリグロシア』第7巻: 39-52 立命館アジア太平洋大学言語教育センター
- 2008. 「講義理解の支援方法」西條美紀『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』: 268-277平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（課題番号16520319）研究成果報告書
- 片山智子・和田綾子. 2003. 「大学の講義理解を助けるストラテジー・トレーニング」『2003年度日本語教育学会春季大会予稿集』134-139
- 門倉正美・他編. 2006. 『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房
- 古宮界. 2004. 『大学の授業を変える——臨床・教育心理学を活かした, 学びを生む授業法——』晃洋書房
- 西条美紀. 2000. 「談話構造図作成法によるノートテーキング」『講座日本語教育』第6分冊: 53-68 早稲田大学日本語研究教育センター
- 2001. 「談話構造図作成法によるノートテーキングの訓練効果について」『紀要』14: 123-136 早稲田大学日本語研究教育センター
- 澤邊裕子. 2001. 「講義に用いられるメタ言語表現の一考察——日本語学習者と日本語母語話者の講義聴解との関係——」『小出記念日本語教育研究会論文集』9: 7-20
- 産能短期大学日本語教育研究室編. 1990. 『大学生のための日本語——効果的学習のために——』産能大学出版部
- 高橋淑郎. 1998. 「講義・論文におけるメタ言語表現」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』43-3: 131-138
- 2000. 「講義におけるくりかえし」『紀要』13 早稲田大学日本語研究教育センター
- 2001. 「〈講義内容〉を構成するくりかえしに関する一考察」『紀要』14 早稲田大学日本語研究教育センター
- 富谷玲子. 1990. 「大学準備教育でのノート・テイキング——専門教育への橋渡しとして——」『日本語と日本語教育』第19号: 66-80. 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
- 中井陽子・寅丸真澄. 2008. 「講義の談話のメタ言語表現」西條美紀『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』: 74-83. 平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（課題番号16520319）研究成果報告書
- 平尾得子. 1999. 「講義聴解能力に関する一考察——講義理解の特徴と日本語学習者が抱える問題点——」『日本語・日本文化』第25号: 1-20. 大阪外国語大学留学生日本語教育センター
- 古別府ひづる. 1993. 「日本語教科書におけるメタ言語表現の使用状況」『広島大学教育学部紀要』第二部第42号: 215-221
- 堀井恵子. 2006. 「留学生初年次（1年生）教育をデザインする」門倉正美他編. 2006. 『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』: 67-78. ひつじ書房
- 三國純子. 1998. 「講義の聞き取りに関する分析と問題点」『文化女子大学人文・社会科学研究』第6集: 211-224
- 山下直子. 1999a. 「外国人留学生の講義理解——理解に影響を与える要因とストラテジーに関する意識調

- 査から」『日本語教育』107号：95-104
- 1999b. 「講義でのノート・テイキングの問題点——外国人留学生と日本人留学生の比較——」『専門日本語教育研究』第1号：24-31
- Jhon Flowerdew. 1995. Research of relevance to second language lecture comprehension — an overview. Jhon Flowerdew (ed.). *Academic Listening — Research perspective*. p.7-29. Cambridge